

## 平成18年度宮城県産業教育審議会議事録

1 日 時 平成18年11月16日(木) 午前10時から正午

2 会 場 県庁4階 特別会議室

3 出席者 委員12名中10名出席

大泉 一貫 委員 笠原 亮太 委員 恵美 文雄 委員

阿邊 英明 委員 船渡 隆平 委員 樋口 龍雄 委員

遠藤 克子 委員 渡邊 孝子 委員 定光 裕樹 委員

小針 正裕 委員

(事務局) 教育次長 課長補佐 職業教育班

4 会議次第

(1) 開 会

(2) 開会挨拶

宮城県教育委員会教育長

(3) 議 事

会長及び副会長の選出

産業教育の現状

・産業教育関係報告

・特色ある教育活動実践校の発表

宮城県一迫商業高等学校

宮城県加美農業高等学校

宮城県工業高等学校

職業観・勤労観を育む社会体験，地域連携について

その他

(4) その他

(5) 閉 会

5 審議内容

大内：議事の 会長および副会長の選出になります。

お手元の産業教育審議会の資料の12ページをお開きください。今回が第1回の審議会ですので、産業教育審議会規則第4条により本審議会の会長及び副会長を、委員の皆様の互選でお願いしたいと思いますが、いかがいたしましょうか。

船渡委員：事務局案をお願いします。

大内：事務局案を提案させていただきます。

阿部：事務局案を申し上げます。会長に大泉委員，副会長に津嶋委員をお願いしたいと思

います。なお、津嶋委員は本日御欠席でございますが、皆様のご賛同があれば、お引き受けいただけるということでございましたので御報告いたします。

大内：事務局案でいかがでしょうか。

ありがとうございます。本審議会の会長に大泉委員，副会長に津嶋委員をお願いいたします。

これから，議事に入りますが，産業教育審議会の資料の12ページ産業教育審議会規則第5条に，会長が議長になると明記されていますので，ここからは，大泉会長に議事を進めていただきたいと思います。よろしく申し上げます。

会長：それでは暫時私のほうで司会を努めさせていただきます。の産業教育の現状というところがございますが，まず，答申後の取組について，事務局から報告をいただきます。

阿部：それでは，教育委員会および高等学校での答申後の取組について御報告させていただきます。

審議会冊子の2ページをお開きください。

宮城教育基本方針・みやぎ新時代教育ビジョン・学校教育の方針としてこういうものを掲げております。詳しくはお読み頂ければと思います。

3ページ4ページに今年2月にいただきました答申の概要を載せてあります。

3ページですが，産業構造の変化及び産業技術の高度化，少子化による生徒数の減少，高校生の厳しい雇用情勢，就業意識の変化，多様な進路希望などを背景として，教育課程の工夫，職業観・勤労観の育成，学習環境の整備，専門教育への理解を図るなど特色ある専門教育の展開が必要であるという答申をいただいております。

4ページをお開きください。

まとめとして，具体的に6項目が答申の中で挙げられております。

一つ目といたしまして，実験・実習の充実や地域連携，二つ目は学校間連携，三つ目は系統的なキャリア教育の推進，四つ目は教員の資質向上，五つ目は専門学科・専門高校の再編，六つ目は専門高校への理解を図る，の6項目についてです。

5ページの教育委員会及び各高等学校での取組概要につきましては，4ページのまとめの番号に対応した構成にいたしました。それぞれの項目に対応する取組について御説明いたします。まず1についてです。インターンシップの推進については，全日制県立高等学校の50校が実施しており，実施率は64.1%です。につきましては，この後各高等学校より発表がありますので割愛させていただきます。2のの高大連携については，宮城県教育委員会と宮城県の大学が協定を結び実施しております。高校生が大学の授業を受けるシステムになっております。17年度の実施状況は公開授業9大学で37講座，公開講座が8大学で39講座実施いたしました。今年度も同様な取組をいたしております。の総合学科につきましては普通科目・専門科目からの幅広い選択が可能な第三の学科といわれておりますが，本県の設置状況は6校です。専門高校間

の連携として、鹿島台商業高校と南郷高校生徒が店舗を設立し、販売活動や旅行企画等を実践しております。

3の は職業観を育む支援事業です。就職スキルアップとして高校3年生を対象に就職試験へ向けた心構えについての講義や面接指導などをおこなっております。就職推進校ですが3校指定いたしまして、系統的な進路指導についての調査研究をおこなっております。子どもの就職を考えるセミナーは今年度から県内3地域で高校生の保護者を対象に、お子さんの進路を考えて頂く機会として開催いたしました。 のキャリア教育総合推進事業につきましては、社会人を外部講師として招聘し、生徒に講演や技術指導等をおこなっていただいております。

のキャリア教育推進地域指定事業につきましては、文科省の指定事業で、平成16年から18年の3年間でありまして、松山地域指定で松山小学校、下伊場野小学校、松山中学校、松山高等学校が小中高の連携で系統的なキャリア教育について研究しております。今月30日に成果発表会が予定されております。 の起業家教育ですが、これは経産省の起業家促進事業として、今年度鹿島台商業高校、蔵王高校、宮城第三女子高校が実践しているところです。4については 県教育委員会の研修ですが、県教育研修センター主催の研修では、各教科に対応する研修会を開催しております。その他地域発信アクション校として、今年度から地域毎に、それぞれの教科について研究実践を行い、研究会を開催しております。オンデマンド事業は、各高等学校の研究授業に指導主事が出かけて指導助言をするという事業です。 の中央研修への教員派遣は、全国規模の各種研修会に教員を派遣しております。 の各学校等での研修会ですが、研究授業や各種研修会を開催しております。研究授業等各種研修会の開催や任意団体ではありませんが、教科研究会主催の研修会も数多く実施されております。

5につきましては、 の先進校視察ですが、県教育委員会主催で教員の専門性を高める研修プログラムとして、研修目的別に7コースに分かれ、今月から県外の先進校への視察をおこなう予定です。 の再編の検討につきましては、県教育委員会では平成22年度までの方向性は「県立高校の後期再編について」で示しておりますが、その後の県立高校の再編については、今後検討予定です。6の の高等学校説明会は県内2地域で中学校教員を対象に県教育委員会主催の説明会を実施しております。 の体験入学等の実施につきましては、各学校で中学生を対象に、主に夏休み等の長期休業中を利用して体験入学等を実施しています。 の学校ホームページ等につきましては、県教育委員会のHPから全ての県立高等学校へのアクセスが可能です。各学校では学校新聞を発行し、保護者のみならず、地域へも配布しております。県教育委員会主催でみんなの専門高校展を昨年から実施しております。以上が現在の取組の状況でございます。最後になりましたが、宮城県産業教育振興協会会報を配布させていただきました。本県専門高校等で新聞に紹介された記事等が掲載されておりますのでご覧いただければと思います。

会長：昨年の答申後の具体的な取組を御報告いただきました。さまざまな取組がなされているということでございますが、委員の皆様これに対する御質問があればご意見をいただきたいと思います。

遠藤委員：今朝河北新聞を見ましたら、加美農校の記事が出ていました。それからみんなの専門高校展で美焼きの心子を買ってきましたが、これも新聞で見ました。社会に情報を提供するときは、マスコミを上手に活用することも大事だと思いますが、それについて計画があれば教えてください。

阿部：委員ご指摘のとおり、優れた取組について、マスコミ等を活用し、広く県民の方々に情報を提供していきたいと思います。

会長：マスコミでの紹介を記録として残すべきではないかと思いますがどうでしょうか。

阿部：本日は、産業教育振興会の記事の記録を活用させていただきました。今後も関係機関と連携を図りながら、記録を徹底したいと考えています。

渡邊委員：事業の成果や評価はどうなっているのでしょうか。

今野：就職内定率に関する事業に関しては参加した生徒からも高い評価を得ています。

会長：インターンシップの受け入れ側の評価はどうなっているかお知らせください。

阿部：専門高校は、企業との連携がうまくいっていると思います。普通科高校はインターンシップ先を探すことが難しく、小中高すべてが実施しているので難しい面もあります。

会長：専門高校は昔から連携でうまくいっているケースが多いのかもしれない。インターンシップがこれから推進されるとすれば、インターンシップ先の開拓が必要になるかもしれません。

それでは、議事の2つ目特色ある教育活動実践校の発表産業教育関係報告について準備ができるまで5分間の休憩をしたいと思います。

会長：それでは、準備が整ったので再開したいと思います。

特色ある教育活動実践校の発表といたしまして、一迫商業高等学校お願いいたします。

#### 一迫商業高校紹介

池田教頭：おはようございます。一迫商業高校の池田と申します。本日はよろしく願いいたします。

本校は昨年度より文部科学省から3年の指定を受け、「日本版デュアルシステム」推進事業に取り組んでおります。本年度2年目を迎えました。本校では、「栗原版デュアルシステム」として、名称を変えて研究を進めています。今日はその取り組みの一部を紹介いたしたいと思います。ご存知のように日本では高い失業率、高い離職率、フリーター、ニートなどの労働問題を抱えています。政府では平成15年に「若者自立・挑戦プラン」を打ち出し、文部科学省では平成16年度より「日本版デュアルシステム」推進事業に取り組んでいます。また、各学校段階に応じた体系的なキャリア教育の推進を行い高校

段階では、スーパー専門高校として特色ある取り組みを行う専門高校等への支援と専門高校等への「日本版デュアルシステム」の推進事業に取り組んでいます。「日本版デュアルシステム」は、学校で授業を受けながら、企業で年間約30日以上の実習を行い、企業の教育力により職業観や勤労観の醸成のみならず、若者を一人前の職業人に育てるようとする取り組みです。

本校での「栗原版デュアルシステム」は、本校がこれまで取り組んできたキャリア教育を発展させました。本校の実態ですが、県北唯一の商業専門高校です。学科は、流通経済科、会計科、情報処理科の3学科であり1学年は3クラスの小規模校となっています。1年生では、「見る」ことを中心に2年生では、「知る」こと、インターンシップなどを体験します。3年生では、「身につける」こと、経験することとしました。特に赤い文字の部分が本校の「栗原版デュアルシステム」の中心的な活動であり長期企業実習としています。

「日本版デュアルシステム」では30日以上長期の企業実習だけを取り扱うのに対して、本校では、「企業実習」、「販売実習」、「起業家研究」の三本柱が大きな特徴です。栗原地域で実施することから「栗原版」として研究を進めています。

この長期企業実習のひとつが、「企業実習」で本校が独自に設定した学校設定科目となっています。これは3年生全員が他の6科目の中から選択し、実習を行いません。

本年度は、12名の生徒が選択して実習をしています。

「販売実習」と「起業家研究」は、流通経済科の3年生の生徒が科目「課題研究」の中で実施しており、「販売実習」と「起業家研究」のいずれかを選択し、実習をします。本校が「栗原版デュアルシステム」を研究していく上でそのねらいを次ぎの5つとしました。

- 1として、学校と地域産業が連携をはかり、地域産業の担い手としての人材の育成
- 2として生徒と受入事業所の効果的なコーディネートのあるありかた
- 3として地域や産業界からの学校への要望の取り入れ
- 4として「起業」の経験
- 5として学校の教育課程上の位置づけ

また、「栗原版デュアルシステム」を実施するにあたり、運営委員会を組織しました。宮城県教育委員会、職業安定所、栗原市や商工会など多くの方々から、指導と支援を頂いています。運営委員会は年3回の開催で、第1回運営委員会の様子です。

長期企業実習のひとつである、学校設定科目「企業実習」は、5月19日から12月15日まで、毎週金曜日5・6時間目で実習をしました。また、夏季休業中に10日程の実習を行い、トータルで年間約30日の実習をします。

1回の実習時間は6時間以内としています。企業実習の受け入れ先は、生徒が将来就きたい職業、興味のある職業の希望をとり、関係機関の協力の下に実習を受け入れていただいています。今年度は、ご覧の事業所に生徒を受け入れてもらっています。

保育所での実習の様子です。一迫町内と花山地区の幼稚園の実習の様子です。これは、地元のスーパーでの実習の様子です。これは、飲食店での実習の様子です。

次に長期企業実習の2つ目の柱である「販売実習」は、3年流通経済科の生徒27名が、科目「課題研究」2単位の中で実習しています。

生徒を4つのグループ(元気ショップ, 京都ホープ, めんそーれ, 札幌武勇伝)に分け、4つの模擬有限会社を作り、会社内に社長などの役職も設けました。

授業の形態としては、木曜日の午後5・6時間目に設定し、町内の空き店舗を借り受けて、生徒が商店名を「きてけさいん」と名づけました。

6月下旬から11月までの5か月間に、8回の販売実習を実施します。11月30日が今年の最後になります。

地元の2業者の協力で、陳列、接客マナーなどの指導を受けながら、仕入、広告作成などの販売促進、販売、経理までを生徒自身でできるように指導しています。

販売促進対策の一つとして生徒が作ったチラシ広告です。

新聞の折り込み広告として前日に、一迫町内の2550戸に配り、宣伝をしています。

今年は、第1回目として、6月29日にオープンいたしました。

オープニングセレモニーでは、3年流通経済科の生徒全員で店の前に並び、「いらっしゃいませ」と元気よく挨拶し、開店できました。

地域の方々に来てもらい、生徒達は慣れない接客に最初は戸惑いながら、徐々に慣れ、自分達が仕入れてきた商品が買ってもらえることの喜びや楽しさを感じ取り、終わりごろには、また明日もやりたいという声も出るほどでした。

4つの模擬有限会社の開店時の様子です。

栗原市では今年度新たに栗原産業祭を企画しました。本校の生徒も販売実習として参加しました。元気に呼び込みをし、お客様からは大変好評でした。陳列した商品はほぼ完売の状態でした。後日、参加した方から「一迫商業の生徒の頑張りに、勇気づけられました。」という感謝のはがきをいただきました。

次に3つ目の柱である起業家研究です。

学校近くで餅菓子屋を営んでいる「もちっ小屋でん」狩野社長さんの協力で商品の開発と販売を行います。8月下旬から11月までの4か月間、木曜日の5・6校時に取り組み、12回の実習を行います。起業家研究は、販売実習と同じ時間の中で取り組んでいます。

これは、起業家研究の様子です。店の人たちと生徒たちです。開発会議の様子です。起業家研究は、ものづくりだけでなく、狩野社長さんが役場の職員を辞め、起業するまでの話や、地域の食文化などについても講義を受けています。

これは、新製品の試作中の様子です。昨年度開発した商品です。蒸しパンで、名前には、商業の商を取り、「高いパンダ」としました。商標登録もしており、なかなか好評でした。ただし、現在は販売していませんが、今年中に販売予定との話です。

開発商品は、米粉を使ったカステラの「米ていら」です。

されに改良を加え商品化し、「美焼の心こ（米ていら）」として商標登録もしています。現在販売されており、大好評です。本日県庁1階で販売させていただいていますので、よろしくをお願いします。

今年度の「いいモノテクノフェア」の中で「みやぎものづくり大賞加工食品部門グランプリ」を受賞し、本校も10月12日に一緒に受賞しました。

今年度開発した商品です。「持夢子（もちムース）」で、キャッチフレーズが「外はモチリ」「中はふわふわ」です。まだまだ、改良の余地がある商品ですが、子ども達のアイディアがふんだんに入っている商品です。

最後になりますが、本校は地域と密着し、地域の強い支援の下で「栗原版デュアルシステム」の研究を推進してきています。この取組は、文部科学省からの指定終了後も継続して実施することにしています。本日発表した内容をさらに充実させたいと考えているところです。以上で栗原版デュアルシステムの取り組みについての発表を終わります。

会長：ありがとうございました。質問等は後で一括してお願いしたいと思います。

つづきまして、加美農業高等学校お願いいたします。

## 加美農業高校紹介

遠藤教諭：

私は、宮城県加美農業校等学校の遠藤と申します。よろしくごお願いいたします。

今日は、「加美農ブランドの生徒を育成するために」ということで、本校の農業教育についてお話しさせていただきます。

農業教育における努力目標は、大きく次の3点を掲げています。

### 1) 魅力ある農業教育の推進

ア．実験実習を通して基礎・基本の定着をはかる。

イ．体験学習を重視し学年に応じた創造的・実践的農業教育を展開する。

ウ．プロジェクト学習の充実をはかり課題解決能力の育成をはかる。

### 2) 地域交流の推進

ア．関係機関との連携をはかり相互理解に努める。

イ．体験学習や施設開放など開かれた学校づくりに努める。

### 3) 農ク・家ク活動の充実

ア．諸活動を通して、自ら学び互いに学ぶ態度の育成に努める。

イ．自発的活動を支援し、個性の伸長と自己教育力の育成に努める。

それでは、農業科と生活技術科の専門選択科目の配置について説明します。

まず農業科は、「農業科学基礎」と「植物バイオ」を学習します。農業科学基礎では4単位、イネを教材として実験実習を多く取り入れるような展開をしております。また、

総合実習では、露地野菜と畜産（中小家畜）を2分の1隔週で実施し、栽培・飼育の基礎を体験させるようにしています。

2年次では、それを受けて、2科目4単位を選択します。まず、基礎学習の積み重ねを必要とする科目群である畜産、植物バイオ、グリーンライフから1科目、そして中核科目である作物、野菜、草花から1科目選択します。地域農業の中心が稲作であり畜産であることを考慮して設置してあります。

また、総合実習は、それぞれの選択に応じた分野で実践的な学習ができるように配慮しています。

3年次は、さらに1科目に絞り込み選択します。ここでは、総合実習と連動させ合計6単位でプロジェクト学習が展開できるように配慮しています。

グリーンライフは、ヒューマンサービス分野として設定し、果樹や露地野菜、畜産を中心とした学校農場を活用し、農業体験学習の企画、援助をする実践的な学習を展開するものです。加美町ではすでにグリーン・ツーリズム事業を立ち上げ、中学生の農業体験学習を受け入れるなど町全体の取り組みとなっており、本校もその一端を担っており、その充実を図りたいと考えております。

これは、生活技術科の場合です。

1年次の農業科学基礎では、露地野菜を教材に栽培の基礎を体験的に学習させます。

2年次では、フードデザインと生活デザインの家庭科目を必修とし、豊かで潤いのある生活を目標とする野菜・草花の学習とグリーンライフの農業科目から1科目選択します。この場合の総合実習は、農業科目の選択と連動しており、体験的、実践的な学習が展開できるように配置しています。3年次では、家庭の必修科目と農業の選択科目から1科目選択し、総合実習と合わせてプロジェクト学習を展開します。

3年次におけるこれまでのプロジェクト学習は、これまで家庭科目と農業科目の両方で取り組んできたが、選択科目にすることにより、ひとつのプロジェクト学習としました。

「グリーンライフ」については、農業科に準じて展開します。

生徒が自ら学ぶ意欲と態度を育む農業教育の取り組みとして大きく2つあげることができます。

ひとつは、農業教育の柱となる農業クラブ活動です。農業クラブは、全国で農業を学ぶ11万人の高校生の全国組織です。いろいろな活動をとおして、「科学性」「社会性」「指導性」を高め、農業はもとより、幅広い産業分野で活躍できる優れた資質を身につけるよう自主的・自発的に活動を行っています。

その中心となるのが「プロジェクト活動」です。本校では専門学習の集大成として、3学年において課題解決学習に取り組むこととなります。その成果は、各種発表大会や年度末に行われる「農業学習発表会」で発表することとなります。

18年度、校内プロジェクト中間発表における発表題を例に挙げると次のようです。

- 農業科
- ・チャレンジ！！加美農漢方豚パート
  - ・山菜栽培散策
  - ・穀菜センターにおける加美農野菜の販売に関する一考察（その2）
  - ・The Growing Sunflower ~生長するひまわり~
  - ・イチゴの新品種をつくる Part 3

農業機械科

- ・油圧式運搬機の製作
- ・リサイクルに挑戦 スピードスプレーヤーの製作
- ・水力発電

生活技術科

- ・ミルクル大作戦 ~消費拡大の巻~
- ・天衣無縫 ~加美農だからこそできること~
- ・Area Advance ~加美農を広め隊~
- ・それいけ！トマト料理

農業クラブの主な活動は、次のようです。

- 各種発表 意見発表やプロジェクト発表  
技術競技 測量競技，家畜審査競技，農業情報処理競技  
その他 研修会

次は，発展する農業学習です。

その1つが，農協を通じた生協との産消直結活動です。

「みちのく豚」や「イネの減農薬・減化学肥料栽培」など生産物を『加美農生がつくった豚肉や米』として販売していただいています。販売時のPRや消費者と生産者の交流会に参加して，生の声を聞かせて頂いたり，激励を頂くなど生徒の自信となり次の学習へと発展しています。

2つ目は，畜産の放課後自主活動への支援です。

搾乳牛や繁殖牛の一般管理など，自主的に参加する生徒への適切な指導を行い，畜産への興味関心を高めるよう支援しています。また，寮生の牛や豚の分娩等への立ち会いを特別許可し，より実践的な指導を行なっています。

3つ目は，家畜共進会や枝肉供励会への積極的参加です。地域開催の家畜共進会や豚肉の供励会に参加して評価して頂くことにより次の学習意欲の喚起に繋がるよう援助しています。

4つ目は，加美町グリーン・ツーリズム推進事業への協力です。

4年目となるこの事業は，長町中学校約270名の生徒に本校で行っている農業学習の体験をしてもらう企画です。3年生の総合実習の時間と合わせ，生徒が中学生に技術指導する形態で行っています。

5つ目は，農場見学の受け入れです。

学校農場では、地域の幼稚園や保育所、デイサービス等年間約二千名の農場見学や体験学習、りんご狩りを兼ねた遠足など様々な形で受け入れていています。これらは、特に農業科や生活技術科2・3年の「グリーンライフ」選択の生徒による体験学習の支援も学習の一環として取り組んでいます。

6つ目は、文科省指定17・18年度みんなの専門高校プロジェクト推進事業の展開です。

内容は、地域の小中学校と連携事業です。これまでの経験や農業学習の成果をもとに農業高校としての特色を生かし、学校農場を活用した農業体験学習等の充実を図り農業教育の活性化を図りたいと考えています。

具体的な展開は、専門選択の特徴を生かし生徒が主役となり、小中学校児童生徒の農業体験学習を支援することになります。このことは、教えることの難しさを実感するとともに、農業学習への自信へとつながっていると確信しています。

〔色麻小学校〕

- 1年 りんご狩り
- 2年 サツマイモの栽培
- 3年 草花栽培活動
- 4年 枝豆の栽培，豆腐づくり
- 5年 コサージュづくり
- 6年 そば打ち

〔色麻中学校〕

- 2年 学習発表会見学
- 3年 校内美化活動（花壇づくり）

〔清水小学校〕

- 1・2年 栗拾い，りんご狩り
- 5年 コサージュづくり

7つ目は、学校開放講座の実施です。

露地畑を開放して、本校農業教員を講師としてネギや白菜、ダイコンなど種まきから収穫・加工まで一連の野菜栽培を体験し「休日の畑遊び」を楽しんでいただいています。

以上のように本校は、「魅力ある農業教育の推進」「地域交流の推進」「農ク・家ク活動の充実」を農業教育の柱と考え、努力目標としてきました。特に畜産分野における実践は、生産で完結していたものを消費者と交流することで、「消費や流通」分野まで実践的に学習できる環境が作られたといえます。そして、新たな課題解決に向けスタートできるという、まさに農業教育の中心をなす「プロジェクト学習」が展開されていると考えています。このことは、生徒のみならず、教職員にとっても大きな成果が期待できます。

今後は、他の分野でも新たな教材が提供され、共に創造的・実践的な農業教育が展開できると確信しています。

会長：ありがとうございました。つづきまして工業高等学校お願いいたします。

宮城県工業高校紹介

齋藤教頭：

本校、大正2年、宮城県で初めて、甲種工業高校として「宮城県立工業学校」が創設されたのが始まりです。

その後、大正8年に「宮城県工業学校」と改称され、昭和23年現在の校名「宮城県工業高等学校」となりました。

平成4年には、新実習棟が完成し、平成6年には新校舎が竣工して、新鋭の施設設備を整えた工業高等学校として、多くの優秀な中堅技術者を産業界に送り出しております。現在の宮城県工業高等学校は、機械科、電子機械科、電気科、インテリア科、化学工業科、情報技術科の6学科24学級、総勢960名の学校です。

輝かしい実績を残す県工業高校の原動力となっているのが、校史を貫く「進取独創」の精神です。時代の変化に対応して、カリキュラム及び設備を整え、生徒の多様な進路希望の達成のために、基礎学力の定着・学習意欲の高揚・一般教養の習得・基本的な生活習慣の確立・宮工生としての誇りと自覚・特別活動の充実・進路意識の高揚を重点目標として取り組んでいるところであります。

このような取組により、このところ、就職率・進学率100%を達成しており、生徒および保護者の満足度の高い工業高等学校と自負しております。

本校は、部活動においても素晴らしい活躍をしています。

特に、サッカー部では、先日行われました選手権大会宮城県予選では、惜しくも準優勝に終わりましたが、総体では22年ぶりに優勝し、インタ-ハイ出場を果たしました。

また、男子バドミントンでは、平成10年まで総体17連覇、通算31回の優勝の実績を残すなど、輝かしい成績を収めております。

では、本校の特色ある学校づくりの取組をご紹介します。

本日は、特に特徴的な3つの取組についてご紹介申し上げます。

まず第1に、将来の有為なスペシャリストの育成を目標として、ものづくりのできる技能・技術者を育てるため、各種資格取得の推進に努めています。本日は特に、この取組に重点を置いてご説明いたします。

専門教科においては、授業での学習内容と各種資格・検定受験のための学習の関連性が強く、資格取得という目標を設定することにより、日常の学習への意欲を喚起することもでき、さらに学習内容の定着を図ることもできます。

以前は、資格取得に対する意識は現在ほど高くはなく、また取り組み方も科によって異なっていたが、ジュニアマイスター顕彰制度の発足や資格に対する企業の要求の高まり、さらに工業高校の特色を生かした進学、AO入試などを希望する生徒の増加により、学校全体として取り組む体制に移行してきています。

ジュニアマイスター顕彰については、全国工業高等学校長協会が主管する認証制度で、各資格にポイントを設定し、取得した資格の合計点で特別な称号を授与するというものです。資格の区分をA～Fとし、ここに示しました得点を与えます。その得点が30点以上の場合にはジュニアマイスターシルバー、45点以上の場合には、ジュニアマイスターゴールドを授与するものです。特に、60点以上のものには、ジュニアマイスター特別表彰が与えられます。

本校取得状況は、このようになっています。

特に、ゴールド取得者の伸びが目立っています。

資格取得の取組の例としてまず始めに、技能士へのチャレンジですが、ご存じのようにこれは、厚生労働省の実施計画に基づいて、中央職業能力開発協会が実施するものです。特級、1級、2級、3級に区分されており、昨年より、2級についても高校生の受験が可能となりました。本校では、希望生徒に対して講習会の実施や放課後・夏季休業中の指導を行い、取得を推進しています。特に、機械科では、平成14年度より技能検定機械加工（普通旋盤）3級の受験の取組を開始しました。1年次からの実習項目の精選を行うとともに、特に切削加工の分野については、2年次終了までに全員が3級課題を製作できるよう指導しています。更に、宮城県職業能力開発協会の「ものづくり教室の支援・高度熟練技能者による相談・助言・指導」事業を活用し、高度熟練技能者を招聘し、実技講習会を開催しています。先ほどの、企業との連携がこれに当たります。

平成17年度より、技能検定2級にも挑戦させています。昨年度は、4名が挑戦し、2名が合格しています。その中で、1名が第43回技能五輪全国大会の切符を手にしました。今年度は、4名受験して3名が合格しました。また、3名が技能五輪へ挑戦し、宮城県予選を勝ち抜き、東京で行われた技能五輪予選会へ出場しています。

その内、1名が全国の学生出場枠3名に入り、技能五輪香川大会の切符を手にし、見事、出場者59人中41位に入りました。出場した学生の中ではトップの成績です。

今年度は、さらに技能検定3級フライス盤の技術講習を開始し、受験者4名すべてが合格しています。今年度の3級対策の講習会を見ますと、放課後や夏季休業を利用して延べ22回、時間数にして約80時間実施しております。これと平行して、2級の講習も実施しています。過去5年の受験結果を見ますと、合格率は75%台で、合格者数は、全国工業高校中第3位です。

旋盤2級及び電子組み立て作業については、ご覧の通りです。

実技講習会の様子です。東北リコーの高度熟練技能者阿部さんです。

第44回技能五輪全国大会この写真は、今年度行われました五輪全国大会の様子です。

もう一つの取組の例として、第2種電気工事士への取組例をご紹介します。

現在の3年生では、第2種電気工事士の資格取得者の割合は、70%を占めており理工系大学や専門分野の就職先を希望している生徒は、ほぼ取得している状況です。

この資格は、技能士と同様、6月上旬（県総体中日）に実施される筆記試験と7月下旬に実施される技能試験（実技試験）の両方に合格しなければ資格取得ができません。そのため、ここに示しましたように、筆記試験対策と実技試験対策に分けて講習会を実施しています。講習会の時間は、朝の0時限学習と放課後の7時限学習で実施しています。

講習会の様子です。

第2種電気工事士の過去7年の合格者の推移は、ここにお示ししたとおりですが、昨年

が全国第15位、今年度が第13位と着実に合格者数が増えています。

この他電気科では、第1種電気工事士や電気主任技術者の資格取得に対する取組も行っており、第1種電気工事士においては、昨年度6名の合格者を出しております。

この他に、多くの資格取得に取り組んでおります。その成果については、本日お渡ししてあります資料をご覧ください。

次に、ものづくりコンテスト等への取組について説明をいたします。

高校生がものづくりに関する技術・技能を競い合うことにより、それらの水準の向上を目指した大会を開催しています。本校でも、生徒の技術・技能の向上及び学習への取組意欲の向上を目的に、果敢に挑戦させています。

先ほど、お話しした旋盤については、技能五輪にもつながるものとなっています。昨年度は、電気工事部門の県大会で見事優勝するなど、これまで多くの実績を上げています。

また、今年度の高校生ものづくりコンテスト全国大会ポスターの部でインテリア科3年鈴木ちひろさんが最優秀賞を受賞しました。

これらの大会にチャレンジし、入賞することで、生徒は何事にも代え難い自信とものづくりのおもしろさを体得できます。

3番目の取組として、企業との連携についてご説明いたします。

まず、本校と企業との教育懇談会を毎年実施しております。これは、毎年県内100社程度の企業に呼びかけ、有為な工業技術者の育成を目指した教育実践を進める方策を探ることを目的として、企業の方に実習の様子を直接見ていただき、意見交換を行うものであります。

企業の方々より、毎年貴重なご意見をいただき、それを基に産業界から求められる知識・技術の水準を視野に入れながら、生涯学習の視点を踏まえ、将来のスペシャリストとして必要とされる専門的知識・技術の育成を目指すとともに、これからの社会の期待に応えうる高い職業能力と職業倫理等を身につけた質の高い人材の育成に当たっております。

先ほどお話ししたように技能士講習会では、県職業能力開発協会の御協力の下、地元企業より高度熟練技能者を招聘し、1月と6・7月の年3回実施しております。

また、情報技術科・インテリア科では、長期休業日を活用してインターンシップを実施しています。特に、インテリア科においては、意欲のある生徒が自ら会社を選び意欲をもって参加する方法をとっており、仕事に対する姿勢が真摯であり真面目であるなど、先方からお褒めの言葉を頂いています。中には、インターンシップ先に就職した生徒もおります。この他、工場見学や就職講演会を実施し、社会人の心構え・経験談・進路決定のプロセス及び仕事についての体験談を聞くことにより、職業観・勤労観の育成や就業意識の醸成を図っています。

このような取組の成果は、「県工」ブランドの定着につながっています。多くの企業が

ら県工生が是非欲しいという求人のお話を受けております。

景気の回復ということもありますが、平成15年度からの求人状況を見ても、求人数は着実に増えてきています。

また、今年度の就職状況を見ても、内定率93.7%、という高い内定率となっております。以前の不況下においても、本校は、高い就職内定率を保っております。特に、就職者の約70%が県内企業に就職しており、その多くが本県工業界の中堅技術者として活躍し、貢献しております。

特に本校生徒の定着率が良く、離職率は卒業3年後でも10%台です。

これからも本校は、我が国のものづくり産業の担い手となるスペシャリスト育成に向け、資格取得の推進や就業体験は勿論「高校生ものづくりコンテスト」を実施し、技能五輪の世界大会を目指したり、日本版デュアルシステムに挑戦するなど、国際競争力のある実践的技術者の育成に努めてまいりたいと思っております。

会長：3つの高校の先生方ありがとうございました。ただいまの発表に対する御質問と職業観・勤労観を育む社会体験、地域連携についての御意見を併せてお願いしたいと思っております。本審議会は、各専門分野から代表の方がお集まりですので、お一人ずつ、それぞれの立場から、お話しをいただきたいと思っております。

笠原委員：発表心強く感じました。求人倍率は1を超え、内定率は向上しているが、全国順位は42位とはどのような事情なのか、学校での課題があれば発表して欲しいと思っております。

(齋藤教頭)

さらなる資格取得をめざしていくためには、現在の実習時間では厳しい状況にあります。今でも、0時間や7時間目といった時間を作って通常授業に加えて、講習の時間を確保してやっています。

技能の高い生徒が県内企業に就職するような環境を整えるためにはどのようにすればよいのか検討することが必要です。

(遠藤教諭)

学習内容を広く社会に理解して貰うことが必要です。就職先や進学先の開拓も必要かと思っております。

定光委員：専門高校の取組はニーズを捉えて取り組まれていることは心強いが、社会の動きはもっと急速であり、企業は採りたい人材が採れない。機械・電気・電子のエンジニアが採りたいのだが、学生がいないという話を聞きます。そのような問題にどのように対処するのか情報をお持ちでしたら議論して欲しいと思っております。

会長：就職率については重要な課題で議論していかなければならないと思っております。求人とのミスマッチという問題も解決しなければならない課題であり、今後その調査も行わなければならないと思っております。

阿邊委員：昨日農業高校校長会で担い手の関係でお話をさせていただきました。専門高校と普通科高校の違いを感じます。専門高校は大変な努力をされており，専門高校を孤立化しては駄目で地域や社会の後押しが必要です。食育や環境教育は生活の質を高めるためのもので，専門高校は，使命感を持って貰うことが必要であると思います。

遠藤委員：ものづくりや生産から人をつくることは，時間がかかり成果が見えない部分があるのは当然です。しかし，必要なものであり，その要素は普通科高校へも導入すべきであると考えます。

船渡委員：技術教育の時間や単位数が少なくなっているのではないかと思います。もっと充実して欲しいと考えます。

恵美委員：どういう人が欲しいかより，どういう人がやめないかを企業は考えています。いくら良い人材を募集しても辞めてしまうのでは意味がないと思います。定着率が低いのは目的意識を持たない豊かな生活の人で，今後，高卒・専門学校卒の求人割合が高くなるのではないかと思います。産業界は変わってきています。

小針委員：専門高校は，資格取得等を経て目的意識が醸成されていくが，普通科志向が高い社会の中では認められない部分もあるのではないかと思います。単位の互換など工夫があればよいと考えます。

樋口委員：中学校から専門高校へ入ってくる生徒のモチベーションを高めているのが，素晴らしいと感じました，普通高校以上に先生方が手をかけていると思います。

渡邊委員：先生方の頑張りの後を生徒がついてくる様子が素晴らしいと思います。進学という目的ではなく職業観を醸成することが必要であり，普通高校でも就職を考えている生徒もいるので単位の互換や交流が必要だと考えます。

大泉委員：前回，職業観・勤労観を育成することは，全ての教育に必要なことであり，地域社会との連携，さらに実技を通じた教育の普遍性について確認したところですが，今日は，連携の仕組みはどうだろうかということで，学校の先生方に発表して頂きました。

実際，授業を担当している先生方から，実習のやりくりが大変だというお話を伺ったり，まだまだ企業や社会からのご理解も十分ではないということや，しかし，企業の一部は専門高校生の採用枠を増やしたり，産業界の変革もあるということなど，お話を伺うことができました。

アウトプットである就職率や進学率を高める方策がみえてきたようにも思います。